

開催報告

2020 年度 玉川脳科学ワークショップ

2021 年 2 月 12 日（表彰式 3 月 19 日）

Zoom & Remo



多様な観点の融合が可能であるということが脳科学の特長であり、さまざまな観点から脳科学研究を進めているメンバーが脳科学研究所には集結している。しかし、日頃はそれぞれの研究に没頭しているため、なかなか他の観点での研究に触れる機会が持てない。この問題を解消し、脳科学らしい研究の発展を促すために、日常から離れ、時間の制約をできるだけ外した状況で、互いの研究について広くかつ深い相互理解と自由な議論を深めることが、本ワークショップの目的だ。

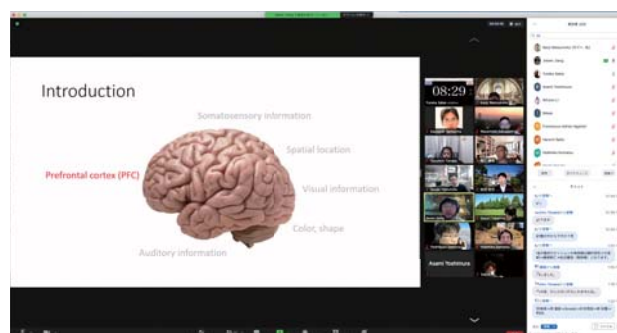
ところが今年度は、世界の歴史を揺るがすような災害に見舞われた。2020 年始めに中国から報告された新型コロナウイルスによる感染症が世界中に広がった。その後、感染性の高い変異株の出現も報告され、我が国でも、首都圏をはじめとする地域では 2 度目の緊急事態宣言が 1 月 8 日に発出され、それがさらに延長され、ワークショップ当日も「宣言」の真っ最中だった。日常の研究・教育活動への影響も避け難いのが現実であり、本ワークショップも当然ながら、従来のような合宿形式で実施することは叶わなかった。

しかし、このような状況であるからこそ、脳科学研究を主体的に進めている本学大学院生（8 名）と研究員（14 名）、脳科学研究所を担う教員（21 名）の、総勢 43 名が集結し、玉川大学におけるこれからの脳科学を発展させるために、初めてのオンライン開催となった本ワークショップに臨んだ。

小松所長による本ワークショップの趣旨説明に続き、各教員がそれぞれの研究室の方向性を説明する Flash talk for Laboratory Introduction I と II を、午前と午後に分けて実施。その間の Special Talk「Human Brain Science Hall と玉川大学」では松田教授が、本学の教育理念の下、教育と研究との橋渡しを促す施設としての新棟の果たすべき役割について明確にした。



そしていよいよメインセッション。Oral Session では、脳科学研究科所属の大学院生がそれぞれ 15 分の持ち時間の中で、自身の研究の現状と方向性について発表した。特に最上級生の吉村麻美さんの発表は、新型コロナ禍の中にありながら着実に実力を付けてきたことがはっきりと現れており、2020 年度ワークショップの最優秀研究賞に輝いた。



ティータイムのブレイクをはさみ、もうひとつのメインセッション、Flash Talk for Poster Sessionでは、すべての研究員がそれぞれ5分という短時間で、続くポスター発表の内容を簡潔に紹介した後、会場を Zoom から Remo に移し、オンラインでの Poster session という試みに挑んだ。これも思いの外、うまく運び、小松所長の総括と、それを引き継ぎ坂上教授がワークショップを締めた。



ネット環境の整った研究所から参加した場合には、緊急事態宣言下ゆえに午後7時には退所する必要があり、表彰式までを当日に完結することは叶わなかったが、翌月には Zoom 上で表彰式も無事に執り行うことができた。

た。1年以上続く新型コロナ禍の中、従来3日間を使って開催してきた本ワークショップをわずか1日に圧縮してオンラインで行うという困難を乗り越えることができたのは、参加者の皆様の協力と努力、研究促進室や各研究室事務担当の皆様のサポートのおかげである。この場を借りて深くお礼申し上げたい。

(脳科学研究所 松元健二)



最優秀研究賞	吉村麻美
優秀研究賞	飯島和樹、川端政則、任翔壙
奨励賞	寿秋露